

## 継続動物飼育と子どもの心の育ち —幼稚園における「命」を大切にするためのとりくみ—

榎戸 裕子

### 1. はじめに

本研究の背景となっているのは、幼稚園において、園児とその保護者を対象に、2006年～2010年の5年間、「身近な生き物との関わり」をテーマにして、命を大切にしようとする心の育成を目指してきた保育のとりくみである。

このとりくみでは、子どもたちの発達段階に合わせてステップを踏みながら、子どもたちが命と関わるという体験を深められるような場をつくってきた。触れ合う生き物や、触れ合う方法も、子どもたちの発達を考えとりくんだ。年少児ではダンゴムシやアリとの園庭などでの触れ合い、年中児ではアオムシやザリガニの継続飼育、年長児ではウサギの継続飼育と、発達に応じて変化させることで、子どもたちが自発的に生き物と触れ合い、発見や交流を深めていくように配慮した。ダンゴムシやアリは園庭で身近に出会う自然の生き物であり、年少児が入園後の比較的早い時期から園庭で触れ合うことができる。アオムシは継続飼育する中で変態して蛹から蝶に羽化し、ザリガニもまた継続飼育において脱皮する姿を見ることができ、年中児が比較的手軽に保育室などで飼育できる生き物である。ウサギは、年長児の体温を感じ反応を返してくれる哺乳類であり、丁寧な継続飼育の中で関係性が培われていくため、年長児にとって多くの経験をすることのできる動物である。こうして、子どもたちの発達段階に合わせて、園庭で出会う生き物から動物の飼育までステップを踏んで、子どもたちが身近な生き物と関わる機会を深めていった。

保育現場で、子どもたちが命との関わりを深めていくステップを踏むには、保育者が命との関わりを常に意識して、心から大切にしている姿を見せ、子どもたちに働きかけていく必要がある。保育者が命ある生き物との関わりを大切にしている姿勢をもたなければ、子どもたちに対しても命あるものを大切にしようとする気持ちに導くことはできない。しかし、今日の若い保育者の中には、虫や動物などの生き物との関わりを苦手にするものも多い。保育者が生き物との関わりの中で命の大切さを子どもたちに伝えていくためには、保育者養成校を卒業していく若い保育者が、保育者養成課程の中で生き物との関わりを通して理論

的にも実感としても命のかけがえのなさを深く学んだ上で卒業していくとくみが必要となる。

平成30年4月1日から施行されている『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の保育内容の領域「環境」では、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」と明示されている。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちあわせて関わるようになる」と記述されており、保育活動において、身近な生き物との触れ合いを通して命の尊さや大切さを知ることの重要性が明記されている。保育者養成課程においても、これに則って命の大切さを伝えることのできる保育者を養成することが重要になってきている。

丁寧な動物の継続飼育が子どもに与える影響について、中川（2010）は次の6点を挙げて、教育における動物飼育の重要性を示している。

- (1)命の大切さを学ばせる：生命尊重、責任感育成。
- (2)愛する心の育成をはかる：情愛、自尊心（自己有用性確認）。
- (3)人を思いやる心を養う：動物や友との共感、友と協力、謙虚さ。
- (4)動物への興味を養う：科学的への入り口。
- (5)ハプニングへの対応：問題を解決しようと工夫することが、生きる力につながる。
- (6)マザーリング（疑似育児体験）：将来の子育ての基礎になる、生命維持の実際と注意点や楽しさを知る。

動物への一時的な触れ合いでも、癒し、コミュニケーションの促進に影響がある。さらに、動物の扱い方で、その子どもの心の状態がわかると記述されている。

この中川の「動物飼育と教育」の関連研究は、多くの議論を呼び起こしてきた。

近年、小学校においても、茂呂（2018）が、生活科の学習の中で、動物飼育を取り入れており、単なる飼育活動ではなく、問題解決学習が連続的に行われ、「観察力や表現力」「強い責任感」「友達との連携や協力」「生命尊重の態度と思いやりの心」、そして、低学年の児童にとっての究極のねらいである「自立への基礎」が培われてきたことを実証しており、

体系的に継続的にとりくむ必要があると述べている。

## 2. 研究目的

2006年からの5年間にわたる「身近な生き物との関わり」をテーマにした保育現場でのとりくみを通して、さまざまなことが経験され、気付かれ、感じられた。本研究では、その多様な経験の中から、(1)子どもたちの心の育ち、(2)保護者の理解と協力、(3)保育者に求められる資質を明らかにする。そのために、本研究では要領・指針の領域「環境」に示された「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」という基本理念が、教育現場において、(1)子どもたち、(2)保護者、(3)保育者の3者の活動の中で、どのように実践されるかを検討する。特に、子どもたちが動物の継続飼育を通して小さな命に触れ、命の大切さを学ぶ過程を検討し、愛情をもって動物に親しみ、子どもたちに命に触れ合える環境を提供できるためには、保育者に何が求められているのかを明らかにする。

保育者自身に求められている資質を自覚的に習得するような保育者養成課程での授業展開に向けた視点を明らかにすることが、この実践研究の目的である。

## 3. 研究方法

5年間の保育現場での身近な動物の継続飼育を通して、命との関わりをステップというとらえ方でまとめた。(4.1～4.3)あわせて保護者を対象に「身近な自然との関わり」についてアンケートを行い、保護者の考えを把握し、分析した。

- 研究対象は、園児数195名のM幼稚園である。(2006年現)近隣には、公共文化施設や集合住宅が立ち並ぶ閑静な住宅地に位置していて、子どもたちの6割は集合住宅に住んでいた。子どもたちは、教育熱心な保護者に育てられ、様々な情報から得た知識は豊富であった。
- 保護者のアンケートは、195名に配布、有効回答174名(回収率89.3%)で、平成18年(2006年)6月に実施した。

## 4. 事例と考察

### 4.1. 概要

平成 18 年度（2006 年）から 5 年間、親子継続飼育活動を通して、命を大切にしようとする心の育成を実践した。

年度	○主なとりくみ	◎成果 ・ ☆課題
18 年	○ 子どもの興味・関心に基づいて動植物と関わることができるように園内環境の見直しをする。 ・ 父親 ・ 栽培園作り ・ 園児 ・ アオムシ用のパセリ植え	◎ 生き物と触れ合える環境を整えたことで、生き物を身近に感じる子どもが増えてきた。 ☆ 子どもの興味・関心の強い飼育に重点をおき、とりくみを考える。
19 年	○ 子どもの発達に合わせた生き物を考え、飼育活動表を作成、実践する。 ・ 年少 ・ ダングムシ、年長 ・ ウサギ ・ 年中 ・ アオムシ ・ ザリガニ	◎ 継続飼育をしたことで子どもの興味・関心が深まってきた。 ☆ 保護者の関心度に差があるため、啓発方法を工夫する。
20 年	○ 保護者の協力を得ながら、“親子飼育活動”にとりくむ。 ・ 獣医師との交流開始 ・ 保護者によるウサギの爪切りなど長期休園時や土日の里親制度	◎ 率先して生き物に触れたり、世話をしたりする親子が増えてきた。 ☆ 家庭や地域に働きかけ、命を感じる教育の浸透をはかる。
21 年	○ 地域の協力を得ながら、保護者に継続飼育の意義を知らせ、親子継続飼育活動の充実をはかる。 ・ 幼小連携講演会 ・ 全国学校飼育動物研究会事務局長中川美穂子氏 ・ 卒園児親子による体験談など	◎ 有識者や獣医師の話聞くことで、継続飼育の意義を知り、飼育活動に関心を示す保護者（特に父親）が増えた。 ☆ 全園児全保護者がとりくむことができるように工夫する。
22 年	○ 親子飼育活動の継続と年長児の発案「ウサギのためのリサイクル活動」に全園児全保護者がとりくむ。 ・ 家庭 ・ 地域 ・ 獣医師 ・ クリーンセンターとの連携 ・ ウサギの死に直面	◎ 年長児の思いが浸透し、園全体でとりくめた。継続飼育することで、保護者から子どもの心の成長を喜ぶ声が多く聞かれた ◎ 死という現実を知り、寂しさ、心の痛みを感じる事ができた。

### 4.2. 事例

M幼稚園の子どもたちは、知識は豊富であったが、自然に触れる体験は乏しかった。虫を見つけると気持ち悪がり、すぐに踏みつぶそうとする姿が見られた。また、行動が伴わなかったり、感情をコントロールすることが難しかったりする姿があった。そこで、地域の特性と保護者の考えを把握するために、「身近な自然との関わり」について保護者

を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、「家族で子どもと一緒に出かける場合、どこへ出かけたいか」の設問に、「海や山、川などの自然と関われる場」を選択した人が合わせて85.6%と圧倒的に多いにも関わらず、実際の家族の外出先は、動物園や遊園地、大型スーパーなど保護者自身があまり子どもと関わらなくても遊べる場を選んだ人は56.3%だった。保護者の願いと現実との差があることが分かった。その理由として、大人の考えは、「自然」といえば、山や川など遠くの自然を求めてしまい、身近にある自然を見る視点に欠けているのではないかと考えた。別の設問でも、「保護者自身が子どもの頃の飼育・栽培に関する経験は、今の自分にどのような影響を与えていますか」という設問に対し、「命の大切さを知った」「思いやりの気持ちをもつようになった」を選択した人は、合わせて72.4%いた。継続飼育・栽培などが心の成長に大切であると感じつつも、「現在、家庭で何か生き物を飼っていますか」という設問には55.7%と半数以上が「いいえ」を選択した。「はい」と答えた中の78.4%は、水辺の生き物と昆虫類で、イヌやネコ、ウサギなどの体温を感じる動物を飼っている家庭は10.9%だった。

この結果から、保育の現場でのとりくみとして、家庭で体験できない「動物」を園で飼育することを通して、子どもたちが命を感じながら、命あるものを大切にすることを育てていくことができるよう、家庭と地域との連携をはかりながら、生き物や動物との関わりをもつ機会を積極的につくっていくことにした。実際の保育記録を基に、年少児、年中児、年長児の発達に合わせて、生き物や動物との関わりをステップというとらえ方でまとめた。

### 年少児～ステップ1

入園当初の年少児クラスの子どもたちは、ダンゴムシやアリなど、身近な生き物に触れた経験が少なく、生き物を見ただけで、「こわい」「あっち行って」と恐怖心を感じる子が多くいた。

#### ステップ1-1「怖がらずにダンゴムシを身近に感じよう」

園庭のどこにダンゴムシがいるかを、保育者たちが把握し、落ち葉を集めて集まりやすい環境をつくり、ダンゴムシがいつでも子どもたちの身近にいるようにした。保育者が率先してダンゴムシ探しをして、楽しんで触れている姿を見せてきたことにより、保育者と一緒にダンゴムシ探しを楽しむ子も出てきた。また、子ども自身がダンゴムシに変身して遊ぶことで、より身近に感じるができるように、保育活動の中や保育参観日に「ダン

ゴムシ体操」を取り入れて楽しんだ。ダンゴムシの動きを真似て、もぞもぞ動いたり、ひっくり返ってばたばたしたり、なりきって遊ぶことができると、自らダンゴムシに関心を示し、園庭でもダンゴムシ探しをしたり触れたりするようになった。

### ステップ1-2 「保護者も一緒に興味・関心をもち身近に感じてもらう」

6月の保育参観日に、親子で制作活動の一つとして、半分に切った牛乳パックに手持ちを付けた「ダンゴムシパック」を作った。そのダンゴムシパックを持ち、親子で、園庭にいるダンゴムシ探しをすると、子どもたちが「ダンゴムシはここにいるよ」と植木鉢や落ち葉の下を探している姿を見て、「よく知っているね」と感心したり、喜んだりする保護者の姿が見られた。その後は、子どもがダンゴムシを入れたダンゴムシパックを家に持ち帰り、次の日に、「友達を連れてきたよ」と言って、家の庭や近くの公園で見つけたダンゴムシを園に持って来るようになった。

また、別の日の保育活動の中で、担任が空箱を利用し、何回も努力を重ね完成した「ダンゴムシ迷路」を子どもたちの前に出すと、ダンゴムシが歩く姿や壁にぶつかると左右どちらに曲がるのかを興味津々に群がって見ていた。何日か続くと、子どもたち自ら、進行方向に障害があると右左右と曲がる習性を発見したり、生まれたばかりの赤ちゃんを見て脱皮をして大きくなることを知ったり、脱皮の最中のダンゴムシを見て、「ダンゴムシが白いパンツをはいている」と友達や先生と笑い合ったり、ダンゴムシが四角の糞をすることを発見したりして、自然に生態を学んでいった。保育者は、子どもたちの目に触れる場所に、ダンゴムシの絵本や図鑑を置き、いつでも見るようにした。

### ステップ1-3 「ダンゴムシに親しみをもとう」

保育参観後、保育室内で観察ができるように、ダンゴムシの飼育を始めた。絵本や図鑑を見て、落ち葉や石を入れたり、弁当を食べている時に、落としたご飯やキャベツなどを入れたり、「好きな食べ物は何だろう」「ラーメンは食べるかな」と疑問に思うことを話したり、家からニンジンやキュウリ、煮干しを持って来たりして、よく入れ物を覗くようになった。また、ダンゴムシは濡れた所が好きということが分かると、保育者と一緒に順番に霧吹きをして、飼育を充実させた。子どもたちは、“自分たちのダンゴムシ”という意識が高まり（エピソード1）、登園後に「おはよう」と声かけをしたり、自分の好きなダンゴムシに名前を付けて呼んだり、死んでしまったダンゴムシの墓を作ったりして、親し

みを感じるようになった。また、飼育の仕方もよく分かってきて、園庭で見つけたダンゴムシを持ち帰り、家庭で飼育する親子も増えていった。

冬になると、冬眠という言葉と意味を知り、「お父さんやお母さんの所で寝てね」「今までありがとう」と言って、公園や園庭に返した。

#### <エピソード1>

「うわ～先生、大変だ！ダンゴムシの家にご飯でいっぱいだよ」と教えに来てくれたR君、みんなと一緒に入れ物の中を覗くと、30匹ぐらいいたダンゴムシが、ご飯の中に埋もれていた。なんと、その近くで、空っぽになった自分の弁当箱を持って立っていたT君。T君は、「だって、お腹がすいたと言ってたんだもん」とにこにこ顔で言った。

担任が、「T君お腹がすかない」と聞くと、「すかない。朝、食べてきた。ダンゴムシは朝食べてないよ」と答えた。ダンゴムシを自分たちの仲間だと思い、大事にする気持ちがよく伝わってきた。

#### <保育者の変化>

年少児の担任の一人は、ダンゴムシが苦手で全く触れられなかったが、子どもたちが喜んで探す姿や「かわいい」と言っている姿に感化され、子どもたちと一緒に餌やりをしたり脱皮をする姿を見たりして、感動をともに味わうことができるようになっていった。さらに、子どもたちの喜ぶ姿を見たいと思い、自宅でもダンゴムシの飼育を始めて好みの餌を見つけたり、ダンゴムシ迷路作りに挑戦したりして、ダンゴムシの生態の面白さに夢中になっていった。気が付いたら、ダンゴムシのことを「かわいい」と思えるようになったと言っていた。

### 年中児～ステップ2

#### ステップ2-1「生き物を見たり触れたりして、興味や関心をもとう」

進級当初より、年中クラス前の廊下には、「生き物コーナー」として、長細い机を並べ、その上に観察できるように透明の入れ物にザリガニやオタマジャクシ、メダカやカメなどを入れているいつでも見ることができるよう設置した。よく通る場所に生き物たちがいることで、自分たちから顔を近づけて覗き込んだり、図鑑の写真と比べたり、触ろうと手を伸

ばしたりする姿がよく見られた。また、環境の変化のある進級当初は、こうした生き物を見ることで自分の居場所として安心できる子どもも多くいた。(エピソード2)

6月の保育参観日(特に父親対象)に、親子登園してもらい、子どもたちが朝の支度をしている間、父親たちに栽培園作りを手伝ってもらった。子どもたちは、その様子を見ながら「お父さん、頑張って!」「お父さん、かっこいい!」と応援しながら、朝の支度をしていた。何人かの母親が、Tシャツの替えを持参し「お疲れ様」と言って渡していた。父親の汗だくになったTシャツを着替えている姿を見た子どもたちから、自然に「ありがとう」と言う言葉が聞こえてきた。支度後、親子でプランターにパセリの苗植えをして、栽培園にキャベツの種まきをした。正門前に親子でプランターを運び、「アオムシの家」と描いた看板を作り、プランターにさし込んだ。降園時には、「このパセリを植えたね」と覗いたり、迎えに来た母親に「これを植えたよ」と鼻高々に教えたりする子どもがいた。

さらに、職員で案を出し合い、どの子ども興味や関心をもつことができるように、表現遊びや集団遊びに生き物の名前や動きを取り入れた。例えば、フルーツバスケットのルールをもとに「生き物バスケット」やペンダントを作り「生き物場所替えゲーム」をしたり、園内にいる生き物の絵を描き「生き物万国旗」を作ったりして楽しめるようにした。日常の保育の中に工夫を加えることで、子どもたちの興味・関心が高まることを再確認した。

#### <エピソード2>

進級当初、クラス替えのため仲良しの友達と別れ、新しい保育室で担任も初めてというクラスになったYちゃんは、環境に馴染めず、言葉も少なめに登園していた。担任やクラスの友達が遊びに誘っても、無言で頭を横に振り涙ぐむ日もあった。ある日、担任が「カメたちがお腹をすかしているかな」と言って、その場を離れると、餌が入っている口の開いた袋に手を伸ばし、カメに餌を与えていた。それからは、毎日登園すると、カメに餌やりをしてじっとカメを見ていることが多くなった。何日かすると、Yちゃんが近付くと、カメもYちゃんに近付いて来るようになった。カメに会いたいという気持ちで登園するようになり、カメに「おはよう、来たよ」「橙組に慣れたの」と自分に問うような声かけをしながら、餌やりをするようになった。その頃になると、担任に笑顔を見せるようになってきた。タイミングをとらえ、遊びに誘うと、手をつないで一緒に外に行くことができた。



### ステップ2-2 「保護者も一緒に生き物に親しもう」

保育者は、降園時や学年だよりで、生き物と触れ合う子どもの姿を、エピソードを交えて伝えたり、保育参観でザリガニを触ったり、パセリの苗植えをしてアオムシの家作りをしたりして、生き物を身近に感じられるようにした。さらに、長期休暇や週末には、家庭に生き物を持ち帰り飼育するという「里親体験」も進めた。(エピソード3)

エピソード3のように、里親体験を通して、保護者自身の生き物に対する感じ方が好意的に変化してきた。

また、“親子わくわく会”と題して、年少児・年中児保護者向け講演会第2部「言葉では伝えられない～心・いのち・脳をはぐくむ～」(中川美穂子氏)を聞く機会を設け、幼児期における継続飼育が子どもの心を穏やかにさせ、命や脳に影響を与えることを知った。

#### <エピソード3> 里親体験時の実際の母親の声より

「ザリガニなどの生き物はあまり得意ではなかったけど、名前を付けて毎日世話をしていたら可愛く思えてきちゃいました」

「私は、園での触れ合いの機会をきっかけに、学年だよりで紹介されていたザリガニスポットへ、家族でザリガニを捕まえに行きました」

「うちのザリガニが脱皮したのですが、私自身初めて見たので感動したわ」

「うちは、途中で死んでしまったんだけど、子どもが涙を流して寂しがりました。すごく大事に世話をしていたので、また飼ってみたいと思いました」

### ステップ2-3 「進んで関わったり、世話をしたりしよう」

継続飼育を通して、子どもたちが主体的に生き物に関わっていけるよう、まずは、保育者が水替えや餌やりをする様子を見せるようにした。このような姿を見せることで、子どもたちは、保育者と一緒に世話をするようになり、「今日は水替えをしないの」「水替えをしないとザリガニが可哀そう」など、徐々に、子どもたち自身が気付いて積極的に世話をしようとする姿が見られた。また、家庭での継続飼育の経験から、「ぼく、家でやっているからできるよ」と自信をもって世話に取り組む姿も見られるようになった。

飼育していた親子ザリガニの死を通して、死ぬと二度と動かなくなるということを実感し、死んでしまった理由について話し合った。「暑かったのかな」「赤ちゃんの餌がなかったからかな」などと子どもなりに考えを出し合う時間を大切に。また、子どもたちが、

生き物の死を体験し、「寂しい」「可哀そうだった」と感じている気持ちに保護者も寄り添い、共感することを大切にされた。生き物の生と死の体験を通して、多くの子どもたちが、生き物に対して、大切に世話をしようという気持ちももてるようになってきた。子どもたちは、年長児から引き継いでもらうウサギの世話を心待ちにするようになった。

### 年長児～ステップ3

#### ステップ3-1 「ウサギの触れ合い方を考えよう」

地域の方から頂いて数年前から育てていたミニウサギ3羽（イチゴ・シロ・クロ）と道路脇に捨てられていたところを市民がを見つけ、市教委を通して連れてこられたロッピーヤー1羽（ロッピー）で、合計4羽のウサギの飼育を任された。世話をしようとする気持ちがあっても、触るのに怖さを感じたり、ウサギの苦しい姿勢で自分本位に抱っこをしたりするのが現状だった。そこで、このねらいに向け、保育室に手作りの室内サークルを作り、その中で放し飼いにしたウサギと子どもたちが触れ合う中で感じた疑問をクラスみんなで話し合うようにした。自分はウサギと遊びたいのにケージから出てこない姿があり、自分のしたいこととウサギの思いが違うこともあることに気付いた。そのことから、ウサギの立場で「散歩がいやなのかな」「外がうるさいのではないかな」と各々が思っていることを出し合い、「ケージから出て来ないときは、散歩をしない」という約束ができた。こうして子どもたちのあいだで、ウサギの目線になってウサギが出てくるのを待つ姿も増えた。徐々に自分から出てくるウサギもいたが、昨年の子供たちとの違いを感じるのか、うなったり噛みついたりするウサギもいた。こうした関わりの難しさに対して、獣医師の助言を受け、保育者が紙芝居を作り、ウサギの気持ちや接し方に気付けるような内容の活動を取り入れた。子どもたちは、自分本位に接するのではなく、「ウサギがどうしてほしいと思っているのか」を考えながら世話をするようになり、目が合う嬉しさ、一緒に散歩に行く楽しさや喜びをもつようになった。ウサギとの触れ合いについて、保護者に、降園時に子どもの心の成長やクラスで決めた約束などを伝えてきたものの、飼育活動に対する関心や理解度に家庭によって大きな差があった。

#### ステップ3-2 「保護者への働きかけ方を考えよう」

そこで、保護者も一緒に生き物に親しむというねらいを設定し、2つの方向性を立てて、実践した。

1つ目は、保育参観日にウサギを教材とした遊びを取り入れた。1つは、フルーツバスケットのルールで「ひっこしウサギ」と名付けた遊びである。4羽のウサギの中から、好きなウサギを選び、模倣をしながら場所移動するゲームを親子で楽しんだ。もう1つは、子どもたちが興味をもって見ている「疑問・質問110」という本の中から、ウサギに関する質問をし、親子で○か×を答える「天才クイズ」である。

2つ目は、近隣の小学校と合同で、年長児保護者と小学校1～3年生児童とその保護者対象に、“親子わくわく会” 幼小連携講演会第1部「いのちを守るってどういうこと？」(中川美穂子氏)の題目で、幼児期から児童期に育ませたい心についての講演を聞く機会を設けた。引き続き、この講演の3部で年長児親子対象に、中川美穂子氏と愛知県獣医師会の方たちに、ウサギとの触れ合いタイムとして、ウサギの心臓の音を聴診器で聞いたり、抱き方を教えてもらったりした。動物を飼うことにより、相手の気持ちを考えようとする力が育ち、動物や友達に対しても優しい気持ちが育つなど、動物の飼育には、人が成長するために必要な要素が詰まっていることが、保護者にも小学生の子どもたちにもしっかりと伝わった。これを機に、肌で温かさを感じられる動物の飼育を始めた家庭が、園でも小学校でも見られた。

講演会後の保護者のアンケートでは、アンケート(173名に配布、有効回答166名)の97%の幼稚園保護者は、「触れ合いの体験で様々な感情が育つことを再確認した」「よかった」と回答した。自由記述では、「命あるものに触れ合うことの大切さを改めて感じた」「親の立場からどのようにしたら園に協力できるかを考えるきっかけとなった」などの意見が聞かれ、多くの保護者から、園の教育に理解を頂いた。

### ステップ3-3 「思いやりの気持ちをもって親子飼育活動をしよう」

親子飼育活動にとりくむ中で、園と家庭での命に触れる活動を通して、連携が深められ、動物に親しむ気持ちがより強くなることをねらいとし、2つの活動を進めた。

1つ目は、ウサギの週末里親を行うこととした。以前獣医師から投げかけられた週末や休日の問題、すなわち、「えさがなくなったらウサギはどうなるのか」「汚い家にずっといるのはどうか」を改めて考え、夏休みと同様、週末もウサギが気持ちよく過ごせるように「里親」を取り入れた。(エピソード4) 2つ目は、卒園した小学校1年生の親子を園に招き、「ちびっこ先生との交流会」と題して、飼育体験談を聞いた。抱き方や世話の仕方、里親をして困ったことの話聞いて、大きく頷いていた。

二学期中頃、飼育していたウサギ（ロッピー）が老衰のために亡くなった。全園児で「動かないね」「冷たいね」「もっと一緒に遊びたかったな」などと、各々が気持ちを話し、お別れ会をした。身近な死に触れたことがない子どもたちにとって、大好きなウサギの死は、今までに感じたことのない悲しみや胸の痛みを感じる経験であった。

<エピソード4> 里親日記より抜粋

「餌でちらかったイチゴのケージを、すぐにきれいにしようと掃除を始めたことにはとても感心し、ウサギの感情表現にもびっくりしました」

「子どもがウサギの気持ちを思いやって接する姿に感動しています」

「初めて、“ロッピーの里親をしていい”と言うので、チャレンジしました。幼稚園から車で帰る間も、“大丈夫だよ”“もうすぐ家だからね”とやさしく声をかけている姿を見て、ジーンとききました」

「掃除をしている様子をよく見ているクロで、掃除をし終わった時には、よく懐いてくれているように思います」

「子どもと主人、それぞれタンポポの葉を持っていると、シロちゃんは、子どもたちの方だけ食べに行き、主人の葉は食べませんでした。主人はへこんでいました」

#### 4.3. 考察

本研究では、M幼稚園での5年間のとりくみを取り上げて、子どもたちが園庭で出会う身近な生き物との触れ合いからはじまって、変態・脱皮する生き物の飼育を経て、体温を感じさせる哺乳動物の継続飼育まで、ステップを踏みながら生き物や動物との関わりを深めていく過程を検討した。この過程を通して、子どもたちの共感的な気持ちの発達が見られ、また、子どもたちと生き物や動物との関わりがステップを踏みながら進んでいくこととともなって、保育者と保護者にも、生き物や動物との関わりを深めていくという変化が見られた。

そこで、この5年間のとりくみを通して、(1)子どもたち、(2)保護者、(3)保育者の3者が、要領・指針の「環境」に示された「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」という幼児教育・保育の基本に照らして、どのように変化したか、また、何が求められているのかを考察する。

(1)子どもたちの発達に合わせてステップを踏みながら動物の継続飼育まで進めていくというとりくみの中で、子どもたちの言葉や態度に他者の視点に立つ共感的な視点が現れ、この共感的な姿勢がステップを進めるとともに深まっていくことが示された。

子どもたちは、生き物や動物との触れ合いや飼育の関わりを通して、「かわいい」「どうしたら喜ぶかな」「もし、自分だったら」と感情移入するようになり、確実に愛着が生まれた。愛着をもちはじめると、動物の表情や仕草で、感情を見てとれるようになってきた。その頃になると、動物だけではなく、友達との関わりの中で、同様に友達の気持ちを察したり考えようとしたりする共感力など、思いやりの心の育ちが見られた。それは、体系的に継続的に、身近な生き物から体温を感じることができる動物との「命」の営みに触れることにより、子どもたちが自分本位で触ったり抱っこをしたりするのではなく、生き物や動物の立場になって、気持ちを考えて世話をするという丁寧な継続飼育の積み重ねがあったからである。

(2)園で子どもたちと生き物との関わりを深めていこうとするとりくみは、保護者にも影響を与え、また、保護者の理解や協力が深まることで園でのとりくみも進展するという相互作用が生まれるようになった。

保護者は、初年度のアンケートで、「家族で子どもと一緒に出かける場合、どこへ出かけたか」の設問に、「海や山、川などの自然と関われる場」を選択した人が合わせて85.6%と圧倒的に多いにも関わらず、実際の家族の外出先は、動物園や遊園地、大型スーパーなど保護者自身があまり子どもに関わらなくても遊べる場を選んだ人は56.3%だった。しかし、園が、生き物や動物との関わりを進めていくことで、以前とは異なり、身近な自然に目を向けるようになり、ダンゴムシ探しやザリガニ釣りなどを親子で出かけるようになってきた。また、特に父親の意識が変わり、親子一緒に出かけることに参加したり、里親に協力的になったりした。

(3)このとりくみを通して、保育者自身が生き物や動物への理解をもち、触れ合いや世話を通して生き物や動物と関わる姿勢をもつことが、子どもたちの共感的な気持ちの発達を促すことも示された。

最初は生き物を苦手になっていた保育者も、子どもたちとともに飼育や生き物との触れ合いに積極的にとりくむ中で、命への理解と気付きを深めていき、真剣に世話をする姿勢で

子どもたちの中から生き物への興味・関心を引きだしていくようになっていった。保育者は、生き物や動物に親しみをもち、子どもたちに、その生き物や動物、つまり、「命」と触れ合うという大切さを伝える姿勢をもつことが求められる。また、生き物や動物がどのように感じているかに思いを馳せながら真剣に丁寧に世話をする姿を見せ、子どもたちにその心の動きを伝えたり、言葉をかける姿を見せたりすることで、子どもたちは無理なく生き物や動物の世話をしたり、「命」に触れ合うことができる。保育現場での「身近な生き物との関わり」をテーマにしたとりくみを通して、保育者に必要とされたのは、子どもたちが動物に触れることを保育者が大事にし、保育者自身が愛情をもって動物に親しみ、子どもたちに命に触れ合える環境を提供できることである。

## 5. 結論

この研究でとりあげた M 幼稚園での 5 年間のとりくみを通して、(1)子どもたち、(2)保護者、(3)保育者のそれぞれについて、園での生き物との関わりを深めるとりくみが、大きな影響を及ぼすことが示された。

(1)5年間のとりくみを通して、子どもたちは、大きな3つのステップを踏んで、生き物や動物との触れ合いや命との関わりを深めていく中で、様々な経験や感情体験をすることが分かった。継続飼育が深まるにつれ、動物だけではなく、自然に友達の表情や仕草を見とり、「〇〇ちゃん、今日元気がないね」「さっき、いやだった」「できてよかったね、うれしい」など、友達の心を思いやる言葉と友達を認め合う穏やかなクラスの雰囲気が見られた。心の成長を数値などで表すことは難しいが、丁寧な継続動物飼育で、思いやりの心が育まれることは確かであることが分かった。

さらに、子どもたちにとって、新しい環境に慣れるための心の拠り所にもなっていることも分かった。また、保護者とともに歩んだことで保護者とのつながりも深まり、子どもたちの心の育ちを感じ、大きな感動を生むことに繋がった。

(2)保護者は、以前とは異なり、身近な自然に目を向け親子で出かけることが増えた。また、子どもが捕まえてきた昆虫やカタツムリなども一定期間、飼育ケースに入れて観察や世話をし、「命」と触れ合う様子を知らせてくれるようになった。

アンケート調査の「ご家庭で生き物を飼っていますか」の設問に、初年度は 44.3%であっ

たが、21年には(173名に配布、有効回答166名)、66.2%となった。これは、園からの様々なとりくみや働きかけが、大きく影響していると考ええる。

大きな3つのステップを保護者と共有しながら、ともに歩んできたことで、子どもたちが、命あるものに思いやりをもち、「命」を大切にしようとする心を育ませることができた。

(3)保育者は、保育活動の中で、生き物や動物との触れ合いが「命」との関わりを深めていく大切さや必要性を自覚することが大事である。生き物や動物を上手に飼育するだけではなく、保育者自身が生き物や動物に親しみ、飼育されている生き物や動物の気持ちを察しながら、興味・関心をもって世話を続けるように仕向けていくことが、子どもたちが「命」に深い興味を抱いて共感的な関わりをもつことを促し、子どもたちが「命」の大切さに気付くことに繋がる。生き物や動物が苦手だった保育者もこのことを理解し、子どもたちとともに真剣に飼育をしようとする気持ちでとりくみ、自らも興味を持続させる努力を続けて苦手を克服していった。その姿勢が、言葉で教えるよりもストレートに、身近な動植物に親しみ、大切にすることを子どもたちに伝えていた。

しかし、現代の若い保育者の中には、虫などの生き物に拒絶的な態度を示す人も少なくない。そこで、保育者養成校において、子どもたちが生き物や動物に関わって「命」の大切さを伝えていけるような保育者になることを目指す必要がある。

2018年4月より、保育者養成課程の2年制短期大学の2年次に在籍しているゼミの学生を対象に、ステップ1「ダンゴムシに親しみをもとう」を目的にとりくみはじめたが、すでにダンゴムシに対して苦手意識をもち、拒否反応を示す学生が現れているのが現状である。

今後の課題として、保育者自身が愛情をもって生き物や動物に親しみ、子どもたちに「命」に触れ合える環境を提供できる保育者を養成するために、保育者養成課程でどのような授業内容を展開できるのか。授業の展開方法を工夫・実践し、課題と可能性を明らかにしていきたい。

## 参考・引用文献

- ・文部科学省, 2017, 『幼稚園教育要領』フレーベル館, pp. 5-7, pp.17-19.
- ・厚生労働省, 2017, 『保育所保育指針』フレーベル館, pp.26-27.
- ・内閣府, 文部科学省, 厚生労働省, 2017, 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレー

ベル館, pp.29-30.

- ・吉良智子, 榎戸裕子, 2010, 「心も知も育つ親子飼育活動－家庭や地域との連携を通して－」, 全国学校飼育動物研究会, 『動物飼育と教育』第14号, pp.20-23.
- ・中川美穂子, 2010, 「学校動物支援のためのガイドラインと全国状況について」, 全国学校飼育動物研究会, 『動物飼育と教育』第14号, pp.4-10.
- ・半田市立宮池幼稚園, 2009, 「“いのち”を感じ、命を大切にしようとする心の育成をめざして－家庭と地域との連携を通して－」, 半田市教育研究発表会, 第42回, pp.80-83.
- ・茂呂美穂子, 2018, 「学校で動物を飼うことの意味」, 全国学校飼育動物研究大会, 『動物飼育と教育』第20回, pp.7-8.



## Continuing Animal Breeding and the Growth of the Empathic Mind of Children: An Attempt in Kindergarten to Bring out Children's Caring for the "Life"

Enokido, Yuko\*

本研究の背景となっているのは、幼稚園において、園児とその保護者を対象に、2006年～2010年の5年間、「身近な生き物との関わり」をテーマにして、命を大切にしようとする心の育成を目指してきた保育のとりくみである。子どもたちが園庭で出会う身近な生き物との触れ合いからはじまって、変態・脱皮する生き物の飼育を経て、体温を感じさせる哺乳動物の継続飼育まで、ステップを踏みながら生き物との関わりを深めていく過程を検討した。その過程の中で、(1)子どもたち、(2)保護者、(3)保育者の3者が、要領・指針の「環境」に示された「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」という幼児教育・保育の基本に照らして、どのように変化したか、また、保育者に何が求められているのかを明らかにした。

- (1)子どもたちは、生き物や動物との日々の関わりを通して、生き物や動物の気持ちや察する力や共感性が、友達にも広まり、心の成長が見られた。また、生き物や動物が子どもたちの心の拠り所となっていた。
- (2)保護者は、子どもたちの様子を見たり保育参観に参加したり、飼育や里親体験をしたりすることを通して、園の教育の理解が深まってきた。深まるにつれ、家族で出かける場所が、動物園や遊園地から、身近な公園や田んぼなどの自然に目を向けるようになった。
- (3)保育者は、生き物や動物との触れ合いを大事にとらえ、「命」と関わりを深めていく大切さや必要性を自覚し、生き物や動物に愛情をもって関わる姿勢が求められている。生き物や動物を苦手な保育者もこのことを理解し、子どもたちとともに真剣に飼育をしようとする気持ちでとりくみ、自らも興味を持続させる努力を続けた。

しかし、現代の若い保育者や保育者養成校の学生の中には、虫などの生き物に拒絶的な態度を示す人も少なくない。そこで、今後の課題として、保育者養成課程において、生き物に親しむという保育者の資質を引き出していくためにどのような授業内容を展開できるのかを検討・実践し、その課題と可能性を明らかにしていきたい。

キーワード：継続動物飼育, 保育における継続飼育, 子どもの心の育ち, 命を感じる教育

---

\*Nagoya Ryujo Junior College

